

京都大学	博士（地域研究）	氏名	木下 彰子
論文題目	現代インドにおける中間層ヒンドゥー教徒の宗教実践 —大量生産される宗教画・神像をめぐって—		
（論文内容の要旨） 本論文は、現代インドにおける都市中間層ヒンドゥー教徒の宗教実践を、特に大量生産された宗教画や神像の使用に着目しながら明らかにするものである。本論文に関わる主な調査は、2003年から2010年までの間（約30ヶ月間）に行われた。主な調査地は、デリーおよびタミル・ナードゥ州のシヴァカシ、チェンナイである。 まず第1章において問題の所在と目的が示されている。従来の研究では、現代インドにおいて、情報メディアや大量生産のテクノロジーの発達により、宗教的知識や物が豊富になることで、人々の宗教実践は個人が選択する消費主義的なものになり、伝統構造から「脱埋め込み化」と指摘されてきた。しかし本論は、社会的文脈から離れた個人が宗教行動を自由に選択するのではなく、都市部において新たにつくられる社会関係のなかで宗教実践は再構築されていることを指摘した。そして、現代インドの都市における社会関係は、「世俗化」論の前提となっている「宗教（私的領域）」と「世俗（公共領域）」の二分法によって理解しうるものではなく、家庭と社会をまたぐ広い領域において、宗教実践と公共文化が相互的に影響を与えながら再構築されていることを指摘した。 第2章では、現代インドで大量生産される宗教画や神像について、歴史や製作過程、流通の実際を臨地調査に基づいて描写している。また、宗教画、神像、宗教グッズの広がりについて、それらがグローバルビジネスとも関連していることや、多様な商品に神イメージが使用されることに対して反発が起こっていることを指摘している。 第3章では、印刷宗教画に描かれる神イメージを調査分析している。大量生産によって神イメージは画一化したのではなく、むしろ多様な地域やセクトに応じた多種類の宗教画が生産されるようになったことを明らかにした。また伝統的な儀軌にしたがわない、「ベイビー・シヴァ」など新たな神イメージも登場してきていることを指摘した。 第4章は、家庭内の礼拝実践の詳細について論じている。神像がおかれる神壇が、家庭内のどのような場所・方角に設置されているのかについては、伝統的な儀軌に従ったものよりも、住居事情や、知人・メディアからの情報にしたがって、多様になっている。また神壇に祀られている礼拝対象物は、従来のように家系的に継承されてきた神像は少なく、自ら（家族）が購入したものと贈与されたものが多い。それぞれの礼拝対象物の履歴にかかる語りは豊富であり、例えば家族が購入したものについて、巡礼に行った土産であることや記念日に購入したものであること、また、贈与物についても、親戚や友人からの心のこもった巡礼土産であることや、結婚や出産という人			

生の節目に特別に贈られたものであることが、聞き取りを通じて記録されている。

第5章では、家庭内の礼拝実践の具体的な内容について議論している。まず、家庭内では寺院と異なり、神像の設置儀礼はほとんど行なわれておらず、神聖性は儀礼的に賦与されるものではないことが指摘されている。そして礼拝対象物の神聖性は、その入手と礼拝を通じた相互交渉的な実践を通して獲得されることを豊富な事例研究から論じている。そして、現在のインドで環境問題が深刻化するなかで、礼拝対象物を「破棄」するときには、従来のように川に流すのではなく、土に埋めたり、聖なる木の下に置いたりなど、実践を変容させていることを示した。

第6章では、宗教的事物(*religious materials*)の破棄が環境汚染の要因として浮上した現代、政府や NGO がどのような取り組みを行っているのかを考察している。具体的には、デリーにおけるヤムナー河汚染問題を中心に提起、現代インドにおいて宗教実践が公共的問題として現れているさまを論じている。今日 NGO の活動は中間層によって積極的に牽引されているが、NGO の活動では、中間層内外の多様な社会集団の関わりがみられた。そしてこの異なる分野や階層の人々の協力により、破棄される宗教的事物を施設において加工・製品化し販売することとで、環境問題と宗教問題そして社会問題を同時に解決しようとする注目される動きが見られることを論じた。

結論では、これまでの議論を要約した上で、現代インドにおける都市中間層ヒンドゥー教徒の宗教実践において、新たな社会関係の広がりの中で、宗教性と公共性が密接な関係をもちながら、相互的影響のもとに変容しつつあることを指摘している。

(論文審査の結果の要旨)

従来の南アジア地域研究においては、都市中間層ヒンドゥー教徒の宗教実践について、その消費主義的な傾向性やヒンドゥー・ナショナリズムとの関連が主に注目されてきた。たとえば大量生産された宗教的事物が礼拝対象物になることは、都市中間層の個々人の消費行動として、あるいは、ヒンドゥー・ナショナリズムの理念の表象として描かれてきたのである。しかし都市中間層ヒンドゥー教徒の礼拝行動が広い社会的文脈に関わる宗教実践であることを考えると、こうした説明はまったく不十分であった。そこでは、礼拝者の宗教的な経験や価値は等閑視され、彼らが都市社会の文脈のなかで新たな宗教実践を構築し、さらには公共文化のありかたにも影響を与える主体であることは無視されてしまう。

本研究は、長期の臨地研究に基づき、都市中間層ヒンドゥー教徒の宗教実践のありかたを実証的に明らかにし、それを彼らの置かれた新たな社会的文脈のなかで理解することを目的としたものである。

まず本研究はデリーの中間層世帯における詳細な調査を通じて、実際に礼拝対象物となっている神イメージの詳細を分析していることが高く評価される。従来の研究においては、ヒンドゥー・ナショナリズムの政治的プロパガンダに用いられるポスターや、商品に印刷された神イメージなどが、しばしば恣意的に選択され、表象分析されることが多かった。本研究によって、礼拝される神イメージは、特定の政治イデオロギーやブランド的な消費文化によって決定されているのではなく、礼拝者の属する多様な地域やセクトなどに応じた多くの種類があること、そこで重視される価値は政治経済的なものであるよりも吉祥や豊饒そして祝福であることが明らかになった。そして伝統的な儀軌にしたがわない、かわいらしさやめでたさを強調した新たな神イメージも登場してきていることが指摘された。

また綿密な調査に基づいて、礼拝場所や方角、礼拝物の設置方法や礼拝方法などについても詳細なデータを収集しており、これらは都市中間層の宗教実践の基礎的なデータとして非常に重要である。さらに礼拝者のライフストーリーおよび礼拝対象物にまつわる記憶についての語りを丹念に聞き取ることにより、彼らの人生径路と礼拝対象物がいかに関わっているかを明らかにしたことは特筆される。神イメージや礼拝方法また入手経路は多様化する一方で、それらをめぐる宗教実践は、礼拝者が生きている都市的な社会関係に深く関わるものであり、神壇での礼拝行為は礼拝者が自らの置かれている社会関係のありかたを再帰的に認識し再考する場としても機能しているという指摘は重要である。

さらに、礼拝対象物の「廃棄」の過程に注目したところは卓抜な着眼点であった。これまでの宗教研究においては礼拝過程に注目が置かれることが多く、廃棄の過程はしばしば看過されてきた。しかし、廃棄は宗教実践過程の重要な一部をなすだけでなく、近年の環境問題の深刻化に伴って宗教的事物の廃棄が公共問題化するなかで、宗

教実践と公共活動の相互的な影響が観察される興味深い領域でもある。宗教的事物の廃棄が環境劣化をもたらしうることに意識的になった結果、従来のように礼拝対象物を川に流すのをやめ、土に埋めたり、聖なる木の下に置いたりする人々が出てきたという発見は重要である。さらに、いくつかの NGO は、宗教的事物の廃棄による環境汚染の問題を社会的弱者のエンパワーメントと結びつけ、廃棄される宗教的事物を施設において加工・製品化し販売しているが、これは、宗教的な感覚を尊重しながらも、既存の宗教実践を変容させ、公共問題の積極的な解決へと結びつけようとする動きであり、新たな宗教実践そして公共文化の構築の試みとして非常に注目される。現代インド市民社会におけるこうした新たな動態を紹介し、宗教性と公共性の相互影響的なからみあいを指摘したことも、本論文の貴重な貢献であった。

以上のように本論文は、現代インドにおける都市中間層ヒンドゥー教徒の宗教実践の実態を解明し、それが都市的な社会関係および公共的課題に即しながら、人々によって主体的に再構築されているものであることを示した画期的な論文であり、南アジア研究ならびに宗教社会学的研究に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 25 年 2 月 5 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。